

# 「虹の松原」における景観管理方策に関する研究 管理内容と景観価値との関連性

A Study on the Landscape Management Strategy in “Niji-no-matsubara”  
Relationship Between the Management and the Landscape Value of Pine Forest

渡辺 太樹<sup>1</sup>・横内 憲久<sup>2</sup>・岡田 智秀<sup>3</sup>・三溝 裕之<sup>4</sup>

<sup>1</sup>正会員 工修 株式会社新日鉄都市開発 (〒103-0027 東京都中央区日本橋1-13-1)

E-mail:Taiki.Watanabe@nscp-net.com

<sup>2</sup>正会員 工博 日本大学理工学部海洋建築工学科(〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1)

E-mail:yokouchi@ocean.cst.nihon-u.ac.jp

<sup>3</sup>正会員 工博 日本大学理工学部海洋建築工学科(〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1)

E-mail:t-okada@ocean.cst.nihon-u.ac.jp

<sup>4</sup>正会員 工修 日本工営株式会社(〒102-8539 東京都千代田区麹町5-4)

E-mail:a5247@n-koei.co.jp

A pine forest is lost recently by lack of change of a lifestyle of people and maintenance of a pine forest. A pine forest changes to a broadleaf tree thereby. "Hakusya-seisyo" which was the traditional landscape of our country was not seen by becoming a broadleaf tree. The landscape peculiar to a beach and the landscape peculiar to an area are lost in future when such situation continues. I have to lead means to make the landscape value of a pine forest to solve this problem.

Therefore, in this study, I lead "management contents of a pine forest and relevance with the landscape value" concretely because the landscape which there was through "management of a pine forest and a daily relation" is the local landscape value.

**Key Words :** Landscape, Transition, Landscape Management, Landscape Value, Niji-no-matsubara

## 1. 研究背景および目的

わが国の代表的な海浜景観として挙げられる「白砂青松(図-1, 図-2)」は、古くに人々による防風・防潮機能(以下, 保安機能)を維持するための管理(植林・間伐など)や日常生活行為(松葉かき)を通じて創りあげられた景観であり, 長い年月にわたって人々が関わることで松林の景観価値が地域に根付いたものである。

しかし, 太平洋戦争終戦以降は, 人々の生活様式の変化や維持管理不足によって松林は放置状態となり, 広葉樹に遷移されることで, 「白砂青松」などの景観を愛でることは難しくなっている。今後, このような状況が進行していくと, 海浜特有の景観だけでなく, これまで地域に根付いてきた景観価値も失われてしまい, わが国の海浜は地域の個性も見出せない荒廃した景観を露呈することになる。それに加え, わが国の松林は, 多くが保安林ということもあり, 大量に伐採することが難しいことを考えると, 一度遷移させてしまうと, 元の姿に戻す

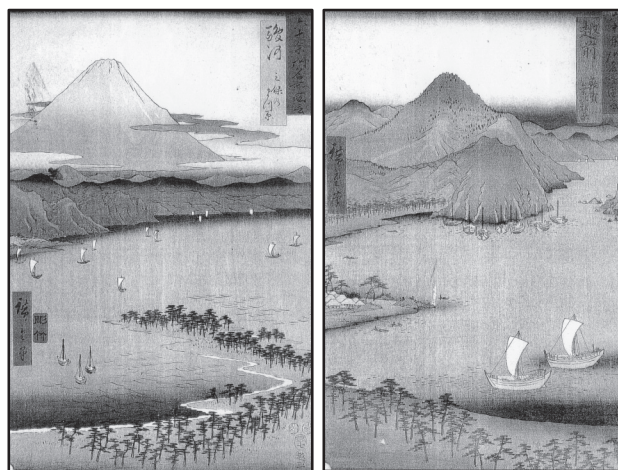


図-1 駿河 三保の松原<sup>1)</sup>

図-2 越前 気比の松原<sup>1)</sup>

のは困難となる。これらのことから, 松林の景観価値喪失の問題は早急に対処しなければならないと考える。

そこで本研究では, この問題の解決策となるべく松林の景観管理方策のあり方を導くため, 松林の管理や日常的な関わりを通じてできた景観がその土地の景観価値と



表-1 調査概要

| 調査方法  | 直接面接形式・電話(FAXを含む)によるヒアリング調査  |
|-------|--|
| 調査対象者 | ①虹の松原の管理者および歴史・管理に関する有識者<br>①佐賀森林管理署【流域管理調整官】<br>・役割：虹の松原の管理主体<br>②唐津市役所【産業経済部観光課】<br>・役割：虹の松原の管理者<br>③浜玉町役場【地域振興課】<br>※2005年1月1日に「唐津市」と合併<br>・役割：虹の松原の管理者<br>④脇山茶屋【巡視員】<br>・役割：虹の松原の管理者<br>(虹の松原の歴史に関する有識者)<br>⑤虹町町内会【会長、ほか2名】<br>・役割：特になし<br>(虹の松原の歴史に関する有識者)<br>⑥松浦文化連盟【会長】<br>・役割：虹の松原の啓発活動<br>(虹の松原の歴史に関する有識者)<br>⑦虹の松原を守る会【会長、ほか2名】<br>・役割：ボランティア団体として松林周辺のゴミ清掃等実施 |
| 調査日   | 2004年10月27日(直接面接形式)：調査先①⑤<br>2004年10月28日(直接面接形式)：調査先②<br>2004年10月29日(直接面接形式)：調査先③④⑥⑦<br>2005年6月10日(電話・FAX)：調査先①②③④⑥<br>2006年2月6日(電話・FAX)：調査先①②③④⑥<br>※○数字は調査対象者欄のものと対応。  |
| 調査内容  | ・植林時から現在までの松林の管理方法・内容について<br>・植林時から現在までの松林の空間状況について<br>・植林時から現在までの松林と人々のかかわりについて<br>※各対象者に上記事項を尋ね、各々の立場で回答をもらった。   |

以降は、植林時から現在までを「虹の松原」における管理形態が著しく変化を遂げた3期として、「官の命令による民の管理(1608年～1868年)」「官と民の連携による管理(1868年～1945年)」「官の主導による管理(1945年～現在)」に分類し、各期における管理内容と景観価値との関連性を述べる。

#### (1)「官の命令による民の管理」(1608年～1868年)

表-2の「松林の管理内容」に示すように「虹の松原」は、江戸時代初期の1608年頃に初代唐津藩主である寺沢志摩守(以下、唐津藩)が海からくる飛砂や潮害から田畑を守るために住民<sup>※3</sup>に藩有林としてクロマツの幼松を海浜の前線部に植林させたことに始まる。そして、唐津藩は、その幼松を早く海浜に根付かせて防砂や防潮の機能が担えるようにするため、風で巻き上げられた砂に埋もれてしまった幼松を住民に「砂かき」をさせたり、無断で松が伐採されないように罰則を設けた厳しい「法度」<sup>※4</sup>を出すことで松を保護していた。これによって、松は徐々に海浜に根付くようになり、生長していった。

その後、唐津藩は、防砂や防潮の機能を促進させるために、松の育成に力を注ぎ、松林が人々によって荒らされないように郷足軽<sup>※5</sup>を雇い、常時松林の「監視」をさせていた。一方、松の生長によって緑量が増加し、松林内に落葉が堆積し始めると、住民はこれを日常生活の燃料(主に炊事などの燃料)として利用するために、唐津藩

に税(年貢)を支払うことで松葉採取の許可を取り、松林内で「松葉かき」を行い始めるようになった。

このような中、表-2の「松林の空間状況・景観評価」に示すように、1783年にこの地に訪れた来訪者の古河古松軒(地理学者)は、砂浜より松林を目の当たりにして、枝葉を広げ始めた翠緑の松と波や夕日などの自然の地物の色が虹色のように調和した姿(「色彩調和(写真-1)」)が虹の様であると景観を評価する。

この要因は、前述した唐津藩による厳しい「法度」の公布や「監視」といった管理を通じて、松が生育しやすい環境がつくられ、緑量を増しはじめたこと(図-5)。これに加え、住民による「松葉かき」が落葉のない白砂だけの空間を創り出したことにより、海浜を構成する様々な色に匹敵するくらいに松の緑や白砂の色が際立ちはじめたからであろう。

これらのように、この時期は官が松林管理の権限を全て握り、住民に管理を命令するといった一方的な管理形態(表-2「管理形態」)であった。

#### (2)「官と民の連携による管理」(1868年～1945年)

時代を経て、1868年の版籍奉還によって藩体制が解体して明治時代に入ると、藩有林だった松林は国有林に編入され、林野庁の佐賀森林管理署<sup>※6</sup>が土地所有者および管理主体となる(表-2「松林の管理内容」)。それにとまって、これまでの厳しかった「法度」や「監視」は廃止され、松をより生育させる新たな管理へと移行した。その新たな管理として、佐賀森林管理署は、日常的に松林と関わりを持ち、松の生育状況などに精通している住民を巡視員(1名)および臨時作業員(作業目的に応じて若干名を集う)として雇い、その雇った住民に専門的な指導をすることで、松林全域の「巡視」や松の生長に悪影響を与える雑草などの「下刈り」「除伐」といった手厚い管理が実現できるようになる。これにより、巡視員を中心とした多くの臨時作業員は的確な松林の管理を日常的に実施できるようになった。そして、1898年に松林が旧森林法<sup>※7</sup>で掲げられる「防風兼潮害防備保安林」に指定されることで、佐賀森林管理署は法に則った保安機能の維持管理が義務付けられ、管理の安定化が図られた。また、住民は厳しかった「法度」や「監視」が廃止されることで自由に松林内に立ち入れるようになるが、生活の燃料採取である松葉かきは、旧森林法において落枝採取等の規制(旧森林法第20条)がかけられているため、土地所有者である佐賀森林管理署に許可を取り、税を納めることでこれまでと同様に継続して行われた。

このような新たな管理が行われる中、表-2の「松林の空間状況・景観評価」に示すように、「1608年～1868年(260年間)」にみられた景観評価は3文献で3箇所(松林



表-2 「官の命令による民の管理(1608年～1868年)」と「官と民との連携による管理(1868年～1945年)」の変遷※2

|                           | 松林の管理内容  |                | 松林の空間状況・景観評価   |     | 松林の愛で方 |      |      |      |      | その他  |
|---------------------------|--|----------------|--|-----|--------|------|------|------|------|------|
|                           | 管理に関する事項   | 管理野態(イメージモデル図) | 内容   | 視現場 | 視対象    | 色彩調和 | 白砂青松 | 樹間越し | 松原一望 | 樹形鑑賞 |
| 官の命令による民の管理(1608年～1868年)  | <p>【1608年頃】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初代唐津藩主が農作物を被害から守るための防風・防潮林とするため、住民に命じてクロマツを植えさせた(文獻5)</li> <li>・唐津藩主が住民に幼松の生育のため植林時からの数年間、砂かきを行わせた(文獻6)</li> <li>・唐津藩主がマツを伐採させないために法度を出した(文獻7)</li> <li>・御足輕は松林が荒らされないように監視を行っていた(文獻8)</li> </ul> <p>【1764年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・許可を受けた住民が落ち松葉を燃料にするため松葉かきを行っていた(文獻7)</li> <li>・住民が松葉かきを行うことで、次第に入会地が作られた(文獻7)</li> </ul> <p>【1817年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幕府が御林の内、立枯・根返・折木があった場合、住民が長さや幹周りを詳細に村役人に伝え、浜崎の庄屋などに書付をして報告させていた(文獻9)</li> <li>・松林前面に砂丘が形成されていくにつれて汀線側に植林される(文獻8)</li> </ul> |                | <p>【1608年頃】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クロマツの植林を行い、その延長規模から「二里の松原」と呼ばれる(文獻6)</li> </ul> <p>【1764年頃】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・松林内の松はまばらであり、巨木が点々と存在し、自由に曲がりかねた枝が四方に伸び、自然の姿を競いあっていた(文獻8)</li> </ul> <p>【1789年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○《来訪者》海浜砂地の濁白く、夕日さながらに映して、紅の色をさらにし、並松青々として紅白青の色をまじへ、虹を見るがごとし(文獻13)</li> </ul> <p>【1789年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○《来訪者》唐津の内、二里の松原、徳末へ向かう路なり、雪さらさら降って景色よし(文獻14)</li> </ul> <p>【1869年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○《来訪者》松の色、水の色、貝の色、まさごの色と、さながら虹の引きはえたらんがごとし(文獻15)</li> </ul>  | *   | *      | *    | *    | *    | *    | *    |
|                           | <p>【1869年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国有林となることで国が管理することになる</li> <li>・国の要請によって、住民が松原保護のため巡視員および臨時作業員として見回りを始める</li> </ul> <p>【1872年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地所永代売買禁制が解除</li> <li>・明治政府が浜崎・砂子地区の松林内の土地を解放するため地券を発行(文獻8)</li> </ul> <p>【1874年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・林地の官民有区分事業</li> </ul> <p>【1886年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・佐賀森林管理署が管理主体となる</li> </ul>  |                | <p>【1868年～1912年頃】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・松は巨木が大半で、樹間が広く、白砂が一面を占めていた(文獻16)</li> </ul> <p>【1889年頃】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○《住民》松浦湾に面し海岸は白砂青松(文獻16)</li> <li>○《住民》一面白砂松々として堆雪を敷き青松林立大なる者は八尺小なる者尺余枝葉屈曲其趣競て奇観を奏するが如し(文獻16)</li> <li>○《住民》大島其の樹間に隠し見して清美の所(文獻16)</li> </ul> <p>【1889年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○《住民》湾曲を描く様が虹に似ているとして、「虹の松原」と呼ばれる(文獻8)</li> </ul> <p>【1892年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○《来訪者》潮の色や青く、砕ける波や白し、いさご明らかなり、松みどりなり、加うるに東雲のむらさきと、夕映のくれないは、いみじくもやさしき調和を見せたり(文獻17)</li> </ul> <p>【1902年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○《来訪者》翼を張れるがごとき松原(文獻18)</li> <li>○《来訪者》白い砂浜と青い松原が映え、虹の形状をしている(文獻18)</li> <li>○《来訪者》湾曲した海の縁を取って長く続く松原(文獻19)</li> <li>○《来訪者》海より一瞬目に松原に無づば、松は一瞬にして陸の方に靡いたその影がけざらしからず面白(文獻19)</li> <li>○《来訪者》緑樹を透かして遠望すれば蒼波をみることができる(文獻20)</li> </ul> <p>【1914年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○《住民》松原内より見る大小さまざまな松が秀を競い、雅を争っている。樹幹錯乱し、接しては連理の枝となり、離れては比翼の鳥の翔るが如し(文獻21)</li> </ul> <p>【1926年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○《来訪者》松原内は白銀の砂と深緑の松樹のみ(文獻22)</li> <li>○《住民》樹幹を椅子状に見越して松浦湾の碧波に映帯する有様(文獻22)</li> <li>○《来訪者》広々と松原の裾が張り、笛の音が響く(文獻23)</li> <li>○《住民》松の裾の張り(文獻23)</li> <li>○《住民》松の間に見上げれば唐津の御朱印船が通る(文獻23)</li> <li>○《住民》松原、砂浜、海の色と虹形の形状(文獻24)</li> </ul> <p>【戦時中】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・造船材用としての伐採により、海岸砂丘に面した松林がまばらとなる(文獻25)</li> </ul> | *   | *      | *    | *    | *    | *    | *    |
| 官と民との連携による管理(1868年～1945年) | <p>【1906年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・巡視員が松の枯死のため補植を行う(文獻10)</li> </ul> <p>【1928年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・佐賀森林管理署が良松育成のため肥料としてアキギミを植えた(文獻11)</li> <li>・佐賀森林管理署が松林を荒らすとして一時的に松葉かきを禁止したが、松林を荒らさないことを条件に許可をする(文獻12)</li> </ul>  |                | <p>【1892年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・旧森林法の制定</li> <li>・防風葉潮害防備保安林に指定される</li> <li>・国有林野法の制定</li> </ul> <p>【1912年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大正元年</li> </ul> <p>【1926年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和元年</li> <li>・内務省から「名勝」に指定(文獻27)</li> </ul> <p>【1941年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・太平洋戦争が勃発</li> </ul> <p>【1945年】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・太平洋戦争が終戦</li> </ul>   | *   | *      | *    | *    | *    | *    | *    |

【凡例】  
 :管理主体 :実施主体が官 :実施主体が住民 ○:景観評価内容 <>:景観評価主体 \* :無関連事項 — :不明事項 ●:景観評価内容から抽出した松林の愛で方  
 【松林の愛で方】 色彩調和: 海浜を構成する樹物やその色の調和を評価、白砂青松: 白い砂と青い松の色のコントラストを評価、樹間越し: 松が遠景となり主対象を評価、松原一望: 松(総林)の俯瞰景を評価、樹形鑑賞: 樹の形を評価  
 【注】表中の記述において文獻なき事項はヒアリングによるものである。(文獻は引用参考文献と一致する)

表-3 「官の主導による管理(1945年～現在)」の変遷※2

|                     | 松林の管理内容  |   | 松林の空間状況・景観評価   |     |     | 松林の愛で方 |      |      |      |      |         | その他 |  |  |
|---------------------|--|---|--|-----|-----|--------|------|------|------|------|---------|-----|--|--|
|                     | 管理に関する事項   | 管理形態(イメージモデル図)  | 内容   | 視点場 | 視対象 | 色彩調和   | 白砂青松 | 樹間越し | 松原一望 | 樹形鑑賞 | 松原と汀線形状 |     |  |  |
| 官の主導による管理(1945年～現在) | <p>【1950年】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・佐賀森林管理署が良松育成のため肥料木としてアカシアを植えた(文献26)</li></ul> <p>【1953年】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・佐賀森林管理署は薄化した松林を元に戻すため、松を植林した(昭和造林)(文献26)</li></ul> <p>【1958年】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・佐賀森林管理署は初の航空防除を行う(文献26)</li></ul> <p>【1959年～1965年頃】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・住民たちは燃料革命により松葉かきを行わなくなる</li></ul> <p>【1968年～】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・虹の松原保護対策協議会(国・県・市)が施行され松林の「保護・育成」に努める(文献30)</li><li>・市が独自に部分的な松林の草刈清掃を専門業者に委託</li></ul> <p>【1979年】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・県が特別名勝「虹の松原」保存管理計画書を策定</li><li>【1979年～1989年】</li><li>・佐賀森林管理署は健全な松を育て、美観を取り戻すため、史上初の間伐を行う(以降10年間で20万本の間引き)(文献29)</li></ul> <p>【1988年】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・松林の環境美化を図るため「松原を守る会」が結成し、年12回の清掃活動(拾遺など)を行う</li></ul> <p>【2002年～2004年】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・市は緊急雇用対策事業として、県道から北側の除草作業やニセアカシアの伐根駆除を実施</li></ul> | <p>法発制</p> <p>農林省 (1925～1978) 農林水産省 (1978～)</p> <p>文部省 (1925～2001) 文部科学省 (2001～)</p> <p>厚生省 国立公園部 (1938～1971) 環境庁 (1971～2001) 環境省 (2001～)</p> <p>【森林法】 植栽禁止 間伐制限 樹形維持 伐木制限</p> <p>【文化財保護法】 樹形維持 伐木制限</p> <p>【自然公園法】 樹形維持 伐木制限</p> <p>【佐賀森林管理署】</p> <p>【保健保安林】</p> <p>【松林】</p> | <p>【戦後以降】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・松葉かきなど人為がなくなると、松林中の白砂を見つけるのは困難となった(文献31)</li></ul> <p>【1979年】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○《住民》砂浜と松原はゆったりとした弧がりを保ち、徐々に美しいカーブを描きながら細まり、山々の中に吸い込まれるが如く続く(文献27)</li></ul> <p>【1980年】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・過密な植栽の結果育った松は、直径が標準を下回るなどいずれも細く弱々しい(文献32)</li></ul> <p>【1983年】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○《来訪者》弧を描く砂浜とともに典型的な白砂青松を見せる(文献33)</li><li>○《来訪者》樹齢数百年のクロマツが玄海灘からの北西季節風によって見事な枝振りを示す(文献33)</li></ul> <p>【1984年】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○《来訪者》優美な弓形の白砂の長い汀と、それに沿って連なる何万株もの老松(文献33)</li><li>○《来訪者》弓形の形状(文献34)</li></ul> <p>【1991年】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○《住民》緑の松原と弧を描く汀(文献33)</li></ul> <p>【1996年】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○《来訪者》白砂青松が描く弧状(文献36)</li><li>○《来訪者》松の枝振りに趣を見せる(文献36)</li></ul> <p>【現在】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・林相の遷移が促進される</li></ul> |     |     |        |      |      |      |      |         |     |  |  |
|                     |  |   |  |     |     |        |      |      |      |      |         |     | <p>【1945】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・太平洋戦争が終戦</li></ul> <p>【1950】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・文化財保護法が制定</li></ul> <p>【1951】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・旧森林法が全面改正され、新たな森林法が制定</li></ul> <p>【1955】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・特別名勝指定(文献27)</li></ul> <p>【1957】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・自然公園法の制定</li><li>・玄海国立公園特別地域に指定</li></ul> <p>【1959】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・松林の一部が名勝の指定解除(文献26)</li></ul> <p>【1972】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・松林の一部が名勝の指定解除(文献27)</li></ul> |  |
|                     |  |   |  |     |     |        |      |      |      |      |         |     |  | <p>【1981】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・保健保安林に指定される</li></ul> <p>【1989】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・平成元年</li></ul> |
|                     |  |   |  |     |     |        |      |      |      |      |         |     |  |  |
|                     |  |   |  |     |     |        |      |      |      |      |         |     |  |  |
|                     |  |   |  |     |     |        |      |      |      |      |         |     |  |  |
|                     |  |   |  |     |     |        |      |      |      |      |         |     |  |  |
|                     |  |   |  |     |     |        |      |      |      |      |         |     |  |  |
|                     |  |   |  |     |     |        |      |      |      |      |         |     |  |  |
|                     |  |   |  |     |     |        |      |      |      |      |         |     |  |  |
|                     |  |   |  |     |     |        |      |      |      |      |         |     |  |  |

【凡例】  
管理主体  
実施主体が官  
実施主体が民間  
実施主体が専門業者  
景観評価内容  
景観評価主体  
無関係事項  
景観評価内容から抽出した松林の愛で方  
松林の愛で方  
色彩調和：海浜を構成する風物やその色の調和を評価  
白砂青松：白い砂と青い松の色のコントラストを評価  
樹間越し：松が派手となり主対象を評価  
松原一望：松の派手な樹形を評価  
樹形鑑賞：松の樹形を評価  
松原と汀線形状：松の樹形と砂浜の組み合わせを評価

【注】表中の記述において文献番号はヒアリングによるものである。(文献は引用参考文献と一致する。)



写真-1 「色彩調和」(視点場:砂浜)

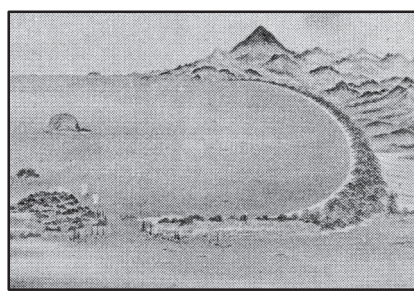


図-5 江戸時代の松林



写真-2 「白砂青松」(視点場:松林内)

の愛で方:1種類)であったのに対し、「1868年～1945年(77年間)」にみられた景観評価は10文献で20箇所(松林の愛で方:5種類)と景観評価が増えていることから、松林の景観価値はより高くなっていることがわかる。

この時代に新たに増えた愛で方として、表-2の「松林の空間状況・景観評価」に示すように、1868年頃に住民によって評価された、緑量と枝ぶりが際立つ松とそれを取り巻く白砂との色の対比(「白砂青松(写真-2)」)や、松の樹間を通してその先に位置する沖合の島への海景(「樹間越し(写真-3)」)を愛でることが挙げられる。また、1880年には同じく住民によって評価された、松林

周辺の高台(図-2参照「舞鶴公園」・「鏡山」)から松林の湾曲形状を俯瞰(「松原一望(写真-4)」)して愛でることや、1914年には、この地に訪れた来訪者によって評価された、奇形を呈した松の樹幹や枝振り(「樹形鑑賞(写真-5)」)を愛でるといった愛で方が増えた。

この期にこのような4種類もの愛で方が見出された要因は、法の下で佐賀森林管理署が管理の枠組みをつくり、その中で住民と連携して「下刈り」や「除伐」などを面的に行うといった効率的かつ的確な管理によって、松林全域において雑草や弱くやせ細った松が刈り取られることで、樹間が広く保たれて松1本1本が生育し



やすくなったこと。そして、住民による継続した「松葉かき」が挙げられる。このような管理を通じて、太く丈夫な松が白砂の上に点在する空間(写真-6)が形成されることで、様々な愛で方が見出されたと推察する。これに加えて、「松原一望」の出現は、「舞鶴公園(図-4)」といった松林が一望できる場所に視点場が開設され、住民たちの憩いの場となったことが要因と考える。そして、「樹形鑑賞」については、継続した管理と松が自然の営力(気温変化・潮風)に長期間晒されることによって奇形を呈したことが要因である。

このように、佐賀森林管理署と住民が連携して効率的な管理を行うようになることで、良好な景観が形成され、表-2の「松林の愛で方」に示すように多くの人々によって5種類もの愛で方が見出されてくると、1926年には、内務省(現：文部科学省文化庁)から史跡名勝の指定を受けるまでの松林となった。

つまり、この期は、これまでのような官の命令による住民の管理とは異なり、官が松の育成管理を効率的に行うために、管理の枠組み(管理要請や管理指導体制)を構築し、その中で住民と連携するといった的確な管理形態がとられていた(表-2「管理形態」)。

### (3)「官の主導による管理」(1945年～現在)

太平洋戦争終戦(1945年)以降、徐々に高度経済成長を遂げてくると石油・ガスが普及(燃料革命)しはじめ、松葉を燃料として使用する人々は減り、松葉かきが行われなくなると、松林内は落葉が堆積することで腐葉土化が進行し、雑草が繁殖しやすい空間へと変わっていった。

このような松林の悪化を重くみた佐賀森林管理署と佐賀県、唐津市<sup>※8</sup>などの行政機関は、1968年に健全な松林の保護育成を図るために、合同で「虹の松原保護対策

協議会」を発足し、主体的に松林の育成管理を行っていく。これを期に行政機関内で管理を始めること(専門業者へ管理委託等)で、住民を雇用した住民たちによる松林管理の機会は減少し、これまでのような住民との連携は徐々に無くなり、官のみによる管理形態へと移行していった(表-3「松林の管理内容」)。やがて、1979年には佐賀県が松林の景観形成も視野に入れた松林の保存管理計画をまとめた計画書を策定することで、この計画書に則って佐賀森林管理署や唐津市は管理を行っていくこととした。

そして現在、佐賀森林管理署は松林維持を目的として松枯れ対策(防除・伐倒)などを松林全域で行っている。また、唐津市においては、景観形成の一環として下刈りや除伐などの管理を行っている。しかし、これは全て専門業者に委託して行っているため(写真-7)、管理費が膨らみ、本来行うべき管理範囲(唐津街道から北側)全域の管理費を一度に賄うことは難しいため、観光客が訪れる場所(唐津街道付近など)を中心に部分的な管理しか行えていない。これらに加えて、近年から住民で構成するボランティア団体が美化活動の一貫として清掃を行うようになってきている。ただし、森林法の第34条1項において松林内の落枝採取などが規制されており、県知事に許可手続きを行わないとできない(場合によっては土地所有者にも申請が必要である)ため、松林内の清掃は容易に行えず、現状は松林外(唐津街道沿道・駐車場)の清掃にとどまっている。

このような管理の変化が起こる中、前述した「1868年～1945年(77年間)」にみられた景観評価は10文献で20箇所(松林の愛で方：5種類)みられたのに対して、表-3の「松林の空間状況・景観評価」に示すように「1945年～現在(61年間)」にみられる景観評価は5文献で8箇所(愛で

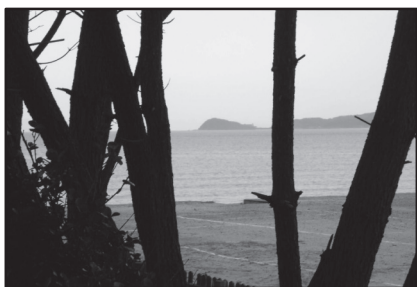


写真-3 「樹間越し」(視点場：松林内)



写真-4 「松原一望」(視点場：舞鶴公園)

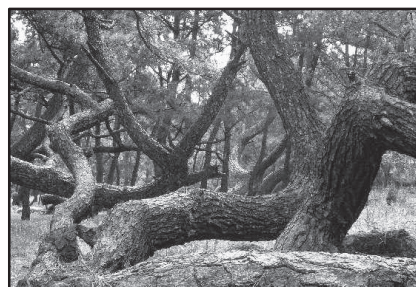


写真-5 「樹形鑑賞」(視点場：松林内)



写真-6 1912年頃の松林<sup>9)</sup>



写真-7 専門業者による管理



写真-8 現在の松林

方:4種類)と景観評価が減少しており、現在では松林の景観価値が失われてしまったことがわかる。具体的には、「色彩調和」と「樹間越し」の愛で方による評価が見られなくなり、代わりに松林の稜線と弧を描いた汀線を眺める(「松原と汀線形状」といった愛で方が新たに見出される。この「色彩調和」と「樹間越し」で愛でられなくなってしまった要因については、これまでの管理内容と現状の管理内容からふまえると3つ考えられる。1つ目として、これまで白砂の空間を形成してきた「松葉かき」が住民の生活背景の変化により行われなくなったこと。2つ目として、官と住民の連携によって行われてきた「下刈り」や「除伐」といった松林の的確な管理が、官による専門業者への委託に代わることで管理費不足を引き起こしてしまい、部分的な管理になってしまっていること。そして、3つ目として、森林法の規制によって容易に松林内の清掃活動などができないことが挙げられる。このような、管理の変化などによって、松林にはほとんど人の手が入らなくなり、松林内で白砂を見出せなくなることはおろか、様々な植物とやせ細った松が混合する空間(写真-8)へと変容することで、「色彩調和」と「樹間越し」の愛で方は見られなくなり、景観価値も薄れてしまったと推察する。また、このような状況下で「松原と汀線形状」が見出された要因として、前述したように松林内が様々な植物で構成される混合林となることで、砂浜から混合林化した松林の稜線が捉えやすくなったためであろう。

こうしたことから、この期は、官と住民の連携した管理形態から一変して、官が主導となり管理を行うことで官に傾いた管理形態となった(表-3「管理形態」)。

## 5. まとめ

本研究では、「虹の松原」の管理内容と景観評価を変遷で捉えることで、官と民の連携によって効率的な管理が行われると多種多様な松林の愛で方が見出される一方、官のみに偏って部分的な管理しか行われなくなると松林の愛で方が減少してしまうというように、松林の管理とその景観価値が密接に関わっていることを明らかにした。

これをふまえて、今後望ましい松林の景観を形成するためには、その土地に松を馴染ませ、松の生長段階に応じて「松葉かき」「下刈り」「除伐」といった松の生長に関与する管理手順が重要になると考えられる。その管理における官と民の連携方策として、1868年～1945年にみられたような土地所有者および管理主体である佐賀森林管理署が住民を雇用し、その住民に管理指導を通

じて管理方法を学習させることで日常的に管理の連携を図っていたことが例に挙げられるが、これは広大な松林を多くの人材によって面的かつ効率よく管理するという意味では重要な姿勢であったと考える。しかし、「虹の松原」にかかる現状の法規制(森林法、自然公園法など)では、上述したような、住民による松林管理(「松葉かき」「下刈り」など)が規制されているため、その松林管理に対する許可権者となる官(佐賀森林管理署や佐賀県)が当該地域の松林管理の枠組み(管理の実施体制・規制行為の許可申請)を再構築し、その官による管理(「下刈り」「除伐」といった専門的な管理)と住民による管理(清掃活動という日常管理)の両者による適切な役割分担が必要になると認識する。

## 6. おわりに

近年では各地で市民参加と称される、一般住民たちの手による景観づくりが進められている。しかし、その実態は文献<sup>30)</sup>などでも指摘されているように、時間や手間を省いた短絡的なものになってしまうことで、本来のあるべき姿とは違う方向に景観が形成されてしまう問題が深刻化している。本研究結果を通じてみると、先にも述べたように、松林の景観管理において、広大な松林は官のみでは手がまわらないため住民がその管理に協力する姿勢を持ち、このため住民は、官から松林の管理技術を真摯に学ぶとともに、官は、管理技術を習得した住民が実際に管理を実行できるよう、法(森林法)に則って公式に管理許可を与えてきた。このことをふまえると、住民参加による景観管理とは、松林を育成するための官民双方の情報共有化(学習)と、それに基づいて官と住民がそれぞれ法的に実行可能な管理(役割)を適切に行うことが重要になるといえよう。こうした協力体制を築いておけば、今後新たな景観問題に直面したときにも、松林に対するそれまでの共有価値に基づき、共感をもって問題解決に取り組むことができるのではなかろうか。そうした市民参加による豊かな海浜景観の形成に向けて、本研究成果が一助となれば幸いである。

**謝辞：**本研究を進めるにあたり、「虹の松原」に関する多大な史料および情報を提供していただいた蒔隆行氏(林野庁佐賀森林管理署)、辻勝昭氏(唐津市役所)、吉村敏身氏(唐津市役所浜玉支所)、中里紀元氏(松浦文化連盟)、脇山好雄氏(松原おこし製造本舗)、橋川忠三氏(虹の松原を守る会)、石橋道秀氏(佐賀県立図書館)、野添つるみ氏(唐津市近代図書館)に感謝の意を表します。



# 【補注】

- ※1 岩手県「高田松原」、福井県「気比の松原」、静岡県「三保の松原」、兵庫県「慶野松原」、京都府「天橋立」、愛媛県「志島ヶ原」、高知県「入野松原」、佐賀県「虹の松原」の8事例である。
- ※2 参考文献・資料およびヒアリング調査結果をもとに作成。(文献)は引用・参考文献と一致する。番号がないものは有識者へのヒアリング調査によるものである。
- ※3 本研究では、松林周辺に住む人々を「住民」とする。
- ※4 松を切り取ったり、枝を一本でも折ったものがあれば、厳罰にするというものである。
- ※5 旧領主の家臣。重要な村に配置され、領内の警備や藩の下働きを行う。身分は士分格で、藩主が交代しても身分は保証され、幕末まで至る<sup>6)</sup>。
- ※6 1886年「福岡大林区署佐賀派出所」、1889年「佐賀小林区署」、1924年「佐賀営林署」、1999年「佐賀森林管理署」と名称の変更が多いため、本研究では便宜上、現在の名称である「佐賀森林管理署」で統一する。
- ※7 1898年に制定した森林法は1951年に全面改正されているため、本研究では「旧森林法」とする。なお、現行の森林法は1951年に制定したものである。
- ※8 2005年に浜玉町が唐津市に編入したため、本研究では編入以前であっても便宜上、浜玉町を含めて唐津市と表記する。

# 【引用・参考文献】

- 1) 安江良介：『広重 六十余州名所図会』、岩波書店、p185, p206, 1996
- 2) 浅見佳世ほか5名：『松原の植生景観の保全に与える管理の影響』、造園学会研究発表論文集, pp. 555～558, 2003
- 3) 田村浩大ほか3名：『海浜空間におけるエコロジカルスケープに関する研究—松林を対象として—』、日本建築学会計画系論文集, pp. 201～208, 2004. 12
- 4) 敷田麻実：『オープンソースによる地域沿岸域管理の試み』、沿岸域学会講演概要集 No17, pp. 92-95, 2004
- 5) 浜玉町史編集委員会：『浜玉町史上巻』、佐賀県浜玉町教育委員会, p812, 1989. 3
- 6) 福岡博佐賀版監修：『江戸時代 人づくり風土記 41 ふるさとの人と知恵 佐賀』、農山漁村文化協会, p49, p52, 1995. 2
- 7) 富岡行昌：『佐賀新聞「虹の松原ものしり帳」』、佐賀新聞社, 1989年8月22日付
- 8) 富岡行昌：『虹の松原今昔物語』、日本砂丘学会誌第47回全国大会, pp. 60～67, 2000
- 9) 浜玉町史編集委員会編：『浜玉町史 資料編』、佐賀県浜玉町教育委編, p96, p111, p221, 1991
- 10) 西日本新聞社：『虹の松原を守ろう』、西日本新聞社, 1980年1月18日付
- 11) 富岡行昌：『佐賀新聞「虹の松原ものしり帳」』、佐賀新聞社, 1989年9月1日付

- 12) 西日本新聞社：『虹の松原を守ろう』、西日本新聞社, 1980年1月24日付
- 13) 本庄榮治郎：『近世社会経済叢書第九巻』、改造社, pp. 180～181, p183, 1927. 2. 26
- 14) 興謝野寛：『日本古典全集第二期 西遊日記』、日本古典全集刊行会, p160, 1827. 8. 20
- 15) 岡吉胤：『松浦の家つと』、1859. 3. 23
- 16) 東松浦郡：『長崎県肥前国東松浦郡村誌第四』、p15, p29, 1883. 12
- 17) 蒲原有明：『松浦あがた』、読売新聞, 1874年6月7日付
- 18) 中村郁一：『佐賀県郷土歌』、木下泰山堂, p43, p50, 1903. 7
- 19) 牧川茂太郎：『松浦名所案内』、唐津牧川書店, p77, 1908. 5
- 20) 二六社：『東京二六新聞』、二六社, 1907年8月13日付
- 21) 吉村茂三郎：『松浦紀行』、木下愛文堂, p72, 1914. 3. 25
- 22) 松代松太郎：『唐津松浦湯』、木下愛文堂, p47, p72, p73, 1927. 10. 1
- 23) 吉村茂三郎・廣重慶樹：『詩と史の松浦湯』、松浦史談会, pp. 46～47, 1927
- 24) 吉村茂三郎：『松浦叢書』、名著出版, p255, 1974. 1. 28
- 25) 村井宏ほか3名編：『日本の海岸林—多面的な環境機能とその活用—』、ソフトサイエンス社, p. 203, 1992
- 26) 司馬遼太郎：『肥前の諸街道 街道をゆく 11』、朝日新聞社, p36, 1983. 2. 20
- 27) 佐賀県教育委員会：『特別名勝「虹の松原」保存管理計画策定書』、p3, pp. 6～7, p9, 1979
- 28) 富岡行昌：『佐賀新聞「虹の松原ものしり帳」』、佐賀新聞社, 1989年9月4日付
- 29) 西日本新聞社：『虹の松原を守ろう』、西日本新聞社, 1980年1月13日付
- 30) 虹の松原保護対策協議会：『平成16年度 虹の松原保護対策協議会 総会』、p5, 2004
- 31) 西日本新聞社：『虹の松原を守ろう』、西日本新聞社, 1980年1月5日付
- 32) 西日本新聞社：『虹の松原を守ろう』、西日本新聞社, 1980年1月6日付
- 33) 佐賀県大百科事典編集委員会：『佐賀県大百科事典』、佐賀新聞社, p636, 1983. 8. 1
- 34) 横山光雄・渡辺達三：『日本の名勝 第四巻 自然Ⅱ』、講談社, p232, 1984
- 35) 園田節子：『肥前の新しい歌枕』、白鷺短歌会・女人短歌会支部潮鳴り短歌会, p80, 1991. 10. 1
- 36) 「日本の渚・百選」中央委員会：『公式ガイドブック 日本の渚・百選』、成山堂書店, p99, 1997. 7
- 37) 菅英志：『日本城郭大系 第17巻』、新人物往来社, p315, 1980. 11. 15
- 38) 松浦文化連盟：『ふるさと思い出写真集 明治大正昭和 唐津』、図書刊行会, p96, p105, 1981. 1
- 39) 斉藤朝・土肥真人：『環境と都市のデザイン 表層を超える試み・参加と景観の交点から』、学芸出版社, pp. 43～44, 2004. 11

(2006.4.17 受付)